



『ハヤブサ消防団』刊行記念 感想インタビュー

けんご

若い世代にこそ、 読んでほしい

TikTokでの活動を通して
様々な小説の魅力を発信している、
小説紹介クリエイターのけんごさん。
今回、『ハヤブサ消防団』の刊行を記念して、
池井戸潤さんの大ファンでもある
けんごさんに感想をお聞きしました。
『ハヤブサ消防団』と池井戸作品の
魅力を大熱弁です！

聞き手・構成／タカザワケンジ

若い世代に『ハヤブサ消防団』を届けたい

最初は『ハヤブサ消防団』というタイトルから、火事の現場を描いた作品なのかなと思いました。実は恥ずかしいことに消防団と消防署の区別がついていなかったんです。この小説で初めて、地域ごとに消防団が存在し、消防だけでなく地域のためにいろいろな活動をしていることを知りました。そ

の運営が地元の人たちの手でボランティア的に行われていることも。

池井戸さんの作品には『空飛ぶタイヤ』のように実際の事件をもとにしたものもあり、その取材力にはいつも圧倒されます。今回も消防団についてはもちろん、小説の舞台になっている八百万町ハヤブサ地区の暮らしや、主人公と住人たちのやりとり、実際にありそうな居酒屋や消防団の集まりなど、何気ない描写やエピソードにリアリティがあり、ハヤブ

サ地区を訪れたような気持ちになりました。

僕は本業がCMなどの映像制作会社勤務なので、地域の見どころを紹介するミステリ仕立てのドラマをつくろうという企画に興味を持ちました。映像クリエイターの立木彩の発案で、ミステリ作家の主人公、三馬太郎がストーリーを考えることになるんですが、現実でも地域を盛り上げるための施策がよく講じられています。若者が都会に出て過疎化していく地域が多いので、地方にどうやって人を呼び込むか、移住を促進するかといった問題もさりげなく織り込まれています。

僕は本業とは別にTikTokで若い世代に小説の面白さや、こんなすてきな作品があるんだよということを伝えていくんですが、池井戸さんは何回も紹介している作家の一人です。

池井戸作品の読者はどちらかと言うと年齢層が高めだと思うんですが、僕はあえて若い世代に届くように紹介していきたい。なぜなら中高生の時の僕に読んでほしいから。

その頃の僕は小説は読んでいなかったのですが、池井戸さんの作品を読んでおけばよかったと思うんです。僕たちがいる社会がどういう仕組みで動いているのか、日本の現状がどうなのかということが描かれている作品が多いので、中高生にとって未知の世界を知る面白さがあるはず。読めば絶対に勉強になると思います。

自分のことを振り返ると、学生の頃は本当に世間知らずで狭い世界で生きていました。池井戸さんの作品を読むこと

で、若者の視野が広がったらいなと思います。
では、どうしたら池井戸さんの作品の魅力を伝えられるでしょうか。

僕は小説紹介動画をつくる時、撮影前に話す内容を一言一句まで練った台本をつくりまします。その作業をする時にいつも考えるのは、小説にまったく興味がない、むしろ小説なんて嫌いだという人に読みたいと思ってもらうにはどう伝えたらいいだろうかということです。

そのために、たとえば池井戸さんのような人気作家、日本のエンタメ業界を担っている作家であっても知らない人がいるという前提で考えます。たとえばこの作家がどういう賞をもらっていて、どう評価されているか、どれだけ売れているかというような周辺情報は入れません。作品を読んで感じた自分の感情を入れながら、作品そのものの魅力を簡潔に伝えようとしています。

『ハヤブサ消防団』の場合なら、消防団のことを知ることができ、連続放火事件の謎を解く面白さといったことです。

僕の場合、小説の紹介は「この本って面白いんだ」と思ってもらえるのがゴールではありません。ゴールはその小説を読んでもらうこと。なぜなら僕は面白い作品を選んで紹介しているのだから「面白そうだな」って思ってもらえるのは簡単なことです。実際に面白い小説なので、難しいのはその先にある、買って読むというアクションを起こしてもらおうことなんです。

組織の中の人間たちを描く池井戸作品

今回の『ハヤブサ消防団』もそうですが、池井戸さんは「その題材を書くんだ!？」と意表を突くようなものを書かれていますよね。『陸王』のランニングシューズの開発、『ルーズヴェルト・ゲーム』の社会人野球。一般の人でその世界に詳しい人はそんなにたくさんいないと思うんです。でも、そういう世界を一般の読者向けに書いて、しかもたくさんの方が共感するってすごいことだと思います。

実際に僕は池井戸さんの作品を読んで知ったことが多いです。『空飛ぶタイヤ』の大手自動車メーカーのリコール隠しや、『七つの会議』の企業内の不祥事のみみ消しは、社会人なら常識かもしれませんが、学生時代に読んだので、こんなことがあるのかと驚かされました。小説を読んで知らないことを学べるってすごいなと思いましたね。エンタメとして楽しみなが、社会について知ることができる。読む価値があると思うから多くの人に読んでほしいんです。

『ハヤブサ消防団』では消防団について知ることができたのが収穫でした。ちょっとしたお金が出ると書かれています。が、ほぼボランティア。地域の人たちのために自分の時間と労力を使っただけで、かっさい。『ハヤブサ消防団』の読者としてまず伝えたいのは、消防団という組織が実際に社会にあって、こういう人たちが地域を支えているんだとい

うことです。

『ハヤブサ消防団』は消防団という組織が舞台ですが、池井戸さんはほかの作品でも組織を描くことが多いです。『陸王』は足袋をつくる会社、『ルーズヴェルト・ゲーム』は電子部品メーカー、『半沢直樹』は大手都市銀行。組織を描くとうなるかと言うと、登場人物が多くなります。池井戸さんの作品はほかの作家さんに比べて登場人物が多いのではないのでしょうか。池井戸さんがすごいのは、たくさんいる登場人物たちをちゃんと書き分けていることです。

僕も今年『ワカレ花』という小説を初めて書かせていただいたのですが、難しかったことの一つが登場人物一人一人の個性を出すことでした。漫画なら見た目で書き分けられますが、小説は文字だけでキャラクターを伝えなければなりません。池井戸さんの登場人物たちを書き分ける筆力は本当にすごい。『ハヤブサ消防団』も例外ではありません。

たとえば僕は分団長の都夫さんがキャラクターとして好きです。消防団はボランティア的なものと先ほど言いましたが、お金にならなくても誇りを持って消防団の仕事をしている。しかも分団長として周りを気遣う姿がかっさいなと思いました。

個性派揃いの脇役に囲まれた主人公、三馬太郎というキャラクターもすばらしいと思います。「団」と名のつくような組織に縁がなく、体格がいいわけでも運動が得意なわけでもない。そんな彼が、「面倒くさい」と思いつつも消防団に入る。

周りに乗せられて断りづらくなったということもあるかもしれませんが、地域で暮らしていくために義務を負うのは当然だと考えています。そういう人間性のよさ。読者として好感を持てるキャラクターです。

主人公も脇役も、こういう人いるよね、応援したくなるよねというリアリティが池井戸作品の魅力の一つだと思います。だから作品が映像化されることが多いのではないのでしょうか。

田舎暮らしとミステリの両軸を楽しめる

『ハヤブサ消防団』には田舎暮らしの日常を描くだけでなく、連続放火事件の犯人は誰か? というミステリ小説の要素があります。最後まで読んだ時、「なるほど、あれが伏線だったんだ」という納得感があって読後感がよかったですね。僕を含めて読者がミステリ小説に求めているのは腑に落ちる謎解きだと思うんです。『ハヤブサ消防団』はリアルな田舎暮らしとミステリの両軸を楽しめる作品です。

そのほかに、いいなと思ったのが食とお酒のシーン。居酒屋△というお店が出てきて、消防団のたまり場なんです。出てくる料理、お酒が美味しそう。団員たちも楽しそう。で、このお店に行ってみようと思えました。僕の勝手な印象かもしれませんが、いい小説って食べたり飲んだりする描

写が印象に残るような気がします。シリアスな作品でも登場人物たちが和んでいる場面があるとホッとしますよね。ほかに『ハヤブサ消防団』は消防団員たちの笑えるエピソードなどがあって楽しいのですが、それだけで終わらないのが池井戸さんの作品です。池井戸さんの全作品に共通して言えることなんですが、読むと元気をもらえる作品なんです。池井戸さんの作品からは「正義は必ず勝つ」や「正しいことをしている人間は報われる」というメッセージ性をいつも感じます。『ハヤブサ消防団』の場合はそこに、地域を守ること、身近な生活を守ることの大切さが加わっています。三馬太郎を始めとする登場人物たちがそのために一生懸命になる姿に元気をもらえるんです。

若者は小説を読まないと言われていきます。でも僕はきっかけがないだけだと思います。僕はTICKTOKという場で、そのきっかけづくりをしたい。きっかけさえあれば読んでもくれる人はたくさんいます。TICKTOKで『ハヤブサ消防団』を紹介したら、中高生たちからどんな反響があるのかいまから楽しみです。

けんご ◆ 作家。小説紹介クリエイター。2020年から小説作品の読みどころを紹介するショート動画を投稿し始め、特に若い世代を中心に絶大な支持を集める。著書に『ワカレ花』がある。